

日本学術会議会長に再選されて



近藤 次郎

学についても、1項目を割いてあります。日本の学術体制が10世紀

のままであり、このままでは、新しい学問分野の発展をかえって妨げているという鋭い指摘が過半数の意見を占めています。14期では、これらの問題について正面から取り組む必要があると思っています。

申すまでもなく、学術会議は、日本の科学者を内外に代表する機関でありますから、会員の皆様も日本学術会議だよりに注目されるとともに、学術会議の審議に各位のご意見を反映させるように取り組んでいただきたいものと考えております。

私は今年の2月14日より、中央公害対策審議会会長に任ぜられております。こちらの方も都市の過密化に伴う環境の悪化や二酸化炭素の増加による温暖化問題など難問をかかえております。その他オゾン層問題など地球的規模の環境問題に対処していかなければなりません。この他、文部省の学術審議会や国土庁の国土審議会、通産省の航空機工業、審議会委員などの仕事があります。

このように仕事特定の個人に集中するのは良いことではないと思いますが、すべて大して権限があるわけではなく、世の中に役に立つ仕事ならばと考えてお引き受けしている次第です。

取り上げる問題の中には、長期的展望の中において不確かな状況のもとで意思決定をすることが必要になってきます。できる限りのOR知識を振り絞ってお役に立ちたいと思っております。

小生もとより浅学菲才の身であり、よわい70を越えて激職に耐えるかどうか、心もとない次第ではありますが、このようになった以上、一生懸命勤めるつもりでおりますので、会員各位のご支援が得られるよう心からお願いする次第であります。

私は7月25日、第14期日本学術会議の最初の総会において、会長に再選されました。会長になると、科学技術会議議員をはじめ、役職として就任しなければならない委員等がたくさんあってきわめて多忙となります。1年間で学術会議が主催、または後援する国際学会は、毎年40を越えますし、海外への出張する仕事が増えますので、文字どおり東奔西走、席の温まる暇もない状態が続きます。そのうえ非常勤ということですから場合によっては私費出張も致さなければなりません。したがって、会長に再選されて、大勢の方々から、おめでとうと祝辞を賜りましたが、学術会議の内情をよく知っている会員の諸君からは、ご苦労様となぐさめられる場合のほうが多い状態です。しかしながら、会長に選挙された以上、全力を振って責任を果すつもりでおりますから、本学会の皆様方からも一層のご支援を賜りたいと思います。

学術会議の活動内容は学会誌にも巻末に載りますが、本年度は、OR学会の会員から私と市川悌信氏と今井兼一郎氏が、第5部に選任され、元会長の松田武彦氏と、現副会長の竹内啓氏が第3部会員に選任されて、学術会議の内部における本学会会員の活躍が一層拡大いたしました。誠に同慶の至りであります。反面それだけ日本学術の推進に果す責任が重くなりました。日本OR学会、日本品質管理学会および日本経営工学会等からも、科学研究費の分科の設立についての要望があり、また、一方においては、科学研究費の重点項目や重点推進研究課題に、経営工学関係の課題が選ばれることが強く要望されています。

第13期では、第3常置委員会が日本の学術水準の分析と研究動向を調査し、本学会もこれに協力いたしました。その結果、400ページにおよぶ学術白書「日本学術研究動向」を出版しました。その中には人文・社会から自然科学に至る71の専門分野につき詳細な分析がされていますが、経営工